

2005. 9 月



「カリキュラムの大切さが分かりました。

カリキュラムをどこまで職員の中で意識して共有できるかが難しそうです。全体像としてどこまで捉えられるか、教職員個々のギャップをどのように埋めていくのか。自分の中で、カリキュラムのイメージが未だにはっきりと捉えられていないような気がします。」

これは、6月のコラム「カリキュラム創造が秘める力」を読んだ方からの意見である。いくら考え方が理路整然としていても、具体がなかったら説得力はない。ここで、再度、確認しておく。カリキュラムは計画・実践・評価・改善のサマネジメントサイクルを重視し、学校や学級の規範、学習上の約束などの潜在的な内容も含んでいるが、教育課程は、あくまでも全体計画や年間指導計画という計画レベルのみであるという考え方に立っている。

そこで、カリキュラムの具体やその創造過程を示してみたい。これまでも年度の初めには、教科・特別活動・道徳・総合的な学習の年間指導計画を用意していた。そして、情報教育や図書館教育など〇〇教育と言う名が付くものは、全てに全体計画、さらにその年間指導計画も用意する学校が多い。しかし、それで終わってないか。子どもの姿・事実と照合し、指導目標や指導内容の配列、時間数、他教科等や行事との関連などから、点検・評価、改善していくことがカリキュラムの前提となる。こ

の前提から、右図のように、まず教科等の年間指導の他に行事や生活上の約束、目指す子ども像を時系列上に書く。そうすることにより、例えば、4・5月の学級経営の重点との整合をみることができる。普通、学級担任は1年間限定で、生きる力を身に付けることに専念することになるが、実は、前学年の育ちや成長を踏まえ学級を運営し、今年度の子ども像を目指すことが重要なのである。

そのためには、教師全員で各学年の目指す子ども像を自覚するとともに、学習と生活の中で子どもの育ちや成長を計画的に確認し、時にはある方向に導く修正策を試みることも必要になる。カリキュラムは、学校教育目標を目指し、学級目標とつながっていないと意味はないし、常に子どもの事実を基にして帰着点に向かうナビゲーションの役目をもつものでもある。（芝）



各学年 A3 1 枚の A 小学校のカリキュラム

平成〇〇年度 □□小学校カリキュラム表(案)
横軸 (時系列・時数)

月	内容等	4月	5月	6月	7月	
縦軸 学年・内容	子ども像					
	行事	↕	↗	↖	↘	
	生活	↕	↗	↖	↘	
	学習 (教科等)	↕	↗	↖	↘	

↕ は、関連や精選・重点化を意味する。